政治とカルトの癒着 追及を

テレビはあまり視聴していないが、毎日夕刊の金平茂紀「週刊テレビ評」は欠かさず読んでいる。ジャーナリストとして活躍する金平さんの鋭い指摘から、学ぶことが多い。20 日の表題のテレビ評を紹介したい。

「8 月ジャーナリズム」という語がある。広島・長崎の原爆忌や終戦記念日を含む 8 月は、マスメディアに関わる者たちは、意識して過去の戦争の惨禍をしっかりと振り返り、そのうえで今の私たちのありようを考え、未来をみつめようという試みを何とか継続してきた。

戦後 77 年の今年もテレビ各局には多くの戦争に関連した番組が登場したが、今年の場合、ロシアによるウクライナ侵攻という現実の戦争が生々しく続いていることから、このウクライナ戦争と過去の日本の戦争を結びつけて考える番組がいくつかみられた。

それは自然なことだ。NHK―BS1「ロシア　ジャーナリストの闘い」や TBS 系「戦争と嘘＝フェイク」などがそうした試みだった。大本営発表の垂れ流しという過去の報道の罪科が、現在においても繰り返されていないかどうか。その現実を直視することがいかに重要か。メディアの一端に関わる者の一人として痛感する。

さて、ここにもうひとつの「戦場」がある。政治家や行政にその影響力が浸透していた疑いが濃い旧統一教会＝世界平和統一家庭連合をめぐる「戦場」のことだ。直接的には、安倍晋三元首相が銃撃・殺害された事件で、山上徹也容疑者の動機形成に関わる核心が、この旧統一教会問題にあることから、にわかにこの教団がクローズアップされている。

長年この問題に深く関わってきた有田芳生氏の言葉「空白の 30 年」の意味するところは深刻だ。1980 年代に「霊感商法」「合同結婚式」などで社会問題化した旧統一教会への追及報道が、90 年代のオウム真理教事件以降、カルトといえばオウム真理教が代名詞になり、旧統一教会に関する追及が弱まった経緯がある。その間、教団は名称を変え延命してきた。

「いわれのない過剰報道だ」とか、この問題を報じることが「山上容疑者の思うツボだ」という声が一部から出ているようだ。バカも休み休みにしてほしい。

教団への献金による家庭崩壊などの被害は現在も続いているし、国政・地方選挙での特定候補者への教団の支援も確認されている。政治とカルトをめぐる癒着、共依存関係をこの機にしっかり洗い出さなければ、将来さらに別の悲劇が繰り返されるおそれがある。これも「戦場」である。カルトおよび腐敗した政治との闘いだ。

そう言えば、戦中の大本営発表の映像を今つぶさにみると、「神国・日本が負けるわけがない」と信じ込んでいた事実は、カルト宗教的にみえてこないか。

（2022 年 8 月 24 日）